

コメント(田中)

## 時代の流れを掴む経済史観

大平さんをよく知る政財界人の中には、「いまだかつて、大平からは具体的な経済政策をきいたことがない」とこぼす人が少なくない。たとえば、経済評論家の土屋清さんは「僕は二十年以上も大平君とはつき合っているが、これまで、彼から具体的な経済政策のビジョンをきいたことが一度もない」と手きびしく批判をしている。

たしかに、計量的、定量的な姿をとった、具体的な経済政策、たとえばGNPの成長率を何%にするとか、国際収支の黒字幅をどの程度に抑えるとか、物価水準や賃上げ率をどうするかといった意味での経済政策については、大平さんが積極的に発言したり、意見を述べたという話は、あまり耳にしない。

しかし、この対談から私を感じたことは、大平さんには、別の意味での経済観、または経済史観ともいふべきものがあり、むしろ政治家としては、そうした経済観こそ大切なのだと確信しているのではないかという点である。

「具体的な経済政策はテクノクラートに任せればよい。政治家、とくに一国の総理にとつて大事なことは、時代を大きく見る目、または経済の流れを大局的に掴む経済眼こそ大切だ」という認識が、大平さんにはあるのではなからうか。

その片りんがこの対談の中でもよく現われる。「もう経済の時代は終わった。われわれは驚くべき高度経済を享受したが、それはわれわれの歴史の中では、ほんのわずかな一時期にすぎず、まさに『権花一朝の夢』にすぎないのだ。今からの問題は、現在、われわれがエンジョイしているこの経済を、どうして維持することができるかということである。そのために政治は全力投球すべきではないか」という発言は、大平さんの経済史観をズバリ表現したものである。そしてさらに「われわれは、これまで経済というものに、不当に大きなアクセントを置きすぎたのではないか。それを経済時代だとすれば、もうそういう時代ではなく、これからは文化の時代であろう。宗教の時代であろう。そういう時代にわれわれは入ったと考えるべきではないか」と続けるとき、大平さんの歴史観ともいうものが、より鮮かにクローズ・アップしてくる。

これまで保守党内の経済論争は、池田勇人に代表された高度経済成長論と、福田赴

夫氏が代表する安定成長論の、二つの系譜の競争的共存であつた。池田内閣を継いだ佐藤内閣は、人心一新をねらい、建て前としては高度成長を否定し、そのひずみ是正に力点を置いたが、その実際の行動は、池田成長路線を引き継ぐものであつた。佐藤内閣の後に出現した田中角栄首相の経済路線も、「日本列島改造論」が証明したように、本質は積極・拡大路線であり、それこそ経済至上主義ともいえるものであつた。

その間、時に野にあり、時に閣内にありながらも福田赴夫氏は終始、安定成長の必要を叫び、高度成長路線に挑戦してきた。昭和四十八年の石油ショックによる世界経済の混迷や、資源不足の危機感、福田流の安定成長、耐乏経済哲学に、時ならぬ脚光を浴びせ、不況のさ中で福田内閣は実現した。しかし、高度成長といい、安定成長といい、一見対立する姿勢ではあつても、その基盤は、ともに経済至上主義ともいえる大ワクに立脚したものだつた。

だが、大平さんの歴史観は、この長らく続いた経済至上主義に挑戦して、その終焉を高らかに告げるものである。従来のワク内での意見の対立ではなく、経済至上主義という大ワクそのものを大胆に否定する発想である。

## 経済価値から文化価値へ

大平さんの政治的系譜は、池田派を継ぐもので、昭和四十六年の四月に、前尾繁三郎氏の衣鉢をついで「宏池会」（故池田勇人氏の創立した政治集団）の会長に就任した。宏池会の経済ブレインは、いうまでもなく、下村治博士で、今日なお下村氏の意見は宏池会に少なからず反映している。

だが、高度経済成長の教祖といわれた下村氏も、いまでは一転して『ゼロ成長論』となり、経済運営や見通しについては、もっともきびしい意見をいまくエコノミストになっている。大平さんは大蔵省時代から下村氏とは知り合いであり、とくに池田内閣時代は、官房長官として、下村氏の経済論とも深くかかわりを持ったはずなので、現在の下村氏の意見を、大平さんがどう受けとめているかは、大方の興味ある点であろう。

対談をみる限りにおいて、大平さんは下村博士の見解にかなり近い意見を述べてい

る。「日本経済の基礎は全く変わった。高度成長を支えてきた基盤が、全く崩れてしまった。その一番典型的なものがドルのゴールドオフだった。そのため世界経済がハイウェイから一転して泥濘にめり込んでしまった」というあたりは、表現こそ違っているものの、下村流の『ゼロ成長論』に相通するものがあるといえる。

もっとも、下村氏の見解は『ゼロ成長』時代に入ったからといって、経済至上主義の放棄を求めているわけではない。しかし大平さんの場合は、国民が現在到着した生活水準の維持さえこれからはむずかしくなり、そのために政治は全力投球すべきだといいつながら、他方では国民に対しては、生活水準を高め、より便利な生活をするには、必要なことには違いないが、人生を考えると、目に見えない、もっと大事なものが、ほかにあることを訴えている。経済価値の時代から、文化価値の時代、さらに法悦の喜びといった宗教的価値まで持ち出し、時代は変わるべきだと強調する。

大平さんの人間形成については、あとでくわしく触れるが、私にはこうした経済観や価値感を大平さんが持つようになったのは、若いときにキリスト教と出会ったり、一橋大学の学生時代に、経済思想史などに興味を持ったことなどと深い関係があるよ

うに思われる。「モノ」から「心」への強調は、高度成長への決別を告げる合言葉として、つい最近まで国民の間に流行したものだ。大平さんのそれは、一時の流行語ではなく、もっと深い信条の奥から派生しているものであろう。

対談の中で「肥った豚よりやせたソクラテスがいいんだということ、もう一度考えてみる必要があるはしないか。『シンプルライフ バット ハイシンキング』、そういう生き方をこれからは人生の指針として生きる時代が、わが国にもやってきたんではなかるうか」というあたりは、大平さんの生活信条の発露であろう。福田的耐乏生活とどこが違うのかと聞き直られる向きには、二宮尊徳とエマーソンの違いとでも答えておこう。

法律、経済の世界で、明けても暮れても育ってきたと思われる大平さんは、川田順の「法律経済などはもち取りの、かかずらわしき学問と思え」という歌がえらく好きである。

「川田順は歴史の勉強をし、歌の勉強をした。経済成長などは、もち取りの、かかずらわしき事柄と思えということでしょう」といって、細い目をいつそう細める。

日本はGNPでこそ大国であるが、資源、食糧などそれを支える経済的基盤は弱く、

いざというとき脆弱さを暴露するのではないかといった警鐘が、最近、わが国でも高まっている。いわゆる経済的安全保障の問題と違ってよい。この点について、大平さんは「もともとわが国はそういう国で、いまさら驚くことはない。日本人の労働力、技術力、経営力が資源のないのを克服して、高度成長をもたらした。今度、その条件が崩れたというなら、頼みは、技術や経営上の能力だ。そして限られた資源をわれわれがどうして確保し、活用して、生活水準を維持するか。そういう工夫をしていかなければならない」と述べ、「嘆いてもはじまらない」と希望を失っていない。

## 高いビジネス社会のモラル

さて、経済体制の話になるが、かつて、大平さんは通産大臣のとき、「ここまで大きくなった民間の経済界に対して、政府とか、役所はあまり干渉すべきではない」と発言し、統制意識に燃える若手官僚たちの反発を買ったことがあるが、いまでも、その考えに変わりはないかと質問したところ、「全く変わりはない。民間の経済はでき

「ただ自主的に動くべきである」と答え、「日本の企業家や経営者には立派な人間が多く、世間でいわれる飽くなき利潤を追求するエコノミックアニマルでは決してない。経営者の生活も内部に入ってみると、みんな控え目で、自らの生活を自制して、社会や企業のために一途に考えている」と、わがビジネス社会のモラルについては、かなり高い評価を払っている。むしろ彼らを抑えすぎているくらいがあるので、もっと自由を与えるべきだとさえいい切っている。

日本人エコノミックアニマル論とからんで興味深いのは、大平さんが公然と、「日本人はエコノミックアニマルではない。日本人はそんなお粗末な国民じゃない。私は欧米人こそ、エコノミックアニマルだと思う」と反論した点だった。

「日本人と欧米人を比較すると、物的欲望の点で、日本人はきわめて淡泊である。昔の江戸っ子などは、宵越しのカネは持たないといってパツと使ってしまう。金銭に對する執着という面では、とても欧米人の比ではない。貧乏人のくせに気前がよい」と大平さんはいう。それにもかかわらず、なぜ日本人はエコノミックアニマルと呼ばれるのか。

否、そんなことはない。エコノミックアニマルという言葉は外国人がつけたものではなく、当の日本人が、自嘲的に自らの上に貼りつけたレッテルにすぎないという説もあつて、その出所は定かではない。

大平さんのエコノミックアニマル否定論の根拠は、日本人が物欲に淡泊なこと、それから、日本人の働きっぷりが必ずしもガムシヤラではなく、むしろ欧米人の労働密度の方がより高いという点にある。そのようにエコノミックアニマルではないのに、日本経済が成長した秘密として、大平さんは、日本が海岸線に恵まれ、海運をフルに利用した点を強調してやまない。この立地条件に加え、戦争による従来古い工場設備の一掃をつけ加える。「日本人エコノミックアニマル論」を否定するときの大平さんの発言には熱がこもり、力が入っている。日本人エコノミックアニマル論は、よほど気に入らないようである。

日本経済を語るとき、「日本株式会社」という言葉が示すように、つねに政府と民間企業の関係が話題に上がる。両者の関係や、あるべき姿について、「通産省が悪名高き通産省でなくなったら、きみ達、その方がむしろいいじゃないかと、私は役人に

向かっていうんだ。役所は民間がやれない仕事をやるべきですよ。アメリカの商務省みたいに、コンサルタント業務をやったらよい。上から民間を監督するとか、規制するとうようなことは、もうよくよくのことがない限り、やらん方がいいんだ」というのが、大平さんの官民関係のあるべき理想的な姿ということになる。

役人の出しゃばりを強くたしなめる一方で、大平さんは、日本の官僚のモラルの清潔さを強調することも忘れない。「日本のような国になってみたいといって、嘆声をはなつ外国の要人がおりますよ」というが、広い世界のことだから、下を見れば限りはない。

官僚モラルの清潔さを認めながらも、もうこれ以上、役所がふえることに対しては、大平さんも反対である。だが、そうはいいいながらも、自民党幹事長として「この十年間をみていると、実際には、役人や役所はふえていない。自民党政府も決してパカではない。予算編成のたびごとに、非常にやかましくいつており、定員はふえていない」と弁解する。しかし、これも中央官庁のことであって、地方政府になると、ルーズなところが多いことを認める発言をしている。中央に関する限り、大平さんの目に映っ

た公務員というのは、相当、頑張って働いているようだが、それでも、役所（大蔵省）にいた自らの体験から、人員はまだまだ合理化しても、仕事は十分やっていけることを認めている。

「長い時間が必要だろうが、役所は定員を少しずつ減らしていく努力が必要」というのが、行政機構に対する大平さんの結論のようだ。パーキンソンの法則を持ち出し、官僚機構の自己拡大を指摘し、まだまだ役所にはメスを入れる余地ありという。

## 飛び出した三島由紀夫

日本経済を論ずる場合、財政の問題を抜きにしては語れない。大平さんも、古巣の問題だけに関心は高い。赤字国債の増発には頭を痛めているようだが、とくに、防衛予算がこんなにも少ないのに、どの先進国にくらべても、赤字国債が一番多いのは、何とも不思議な現象であるという。

その理由として、不況による税収の伸び悩みと、支出の増加をあげ、しばらくは、

このアンバランスは致し方ないが、かりそめにもインフレ政策といったイージーな手段で、この政府の膨大な債務を帳消しにするような誘惑にかられることがあってはならないと強調する。「それでは国民にとって、あまりにも酷いことです」とインフレ抑制の決意のほどを示す。

財政を語ることは、同時に、それを担う大蔵官僚を語ることになるが、自分もその出身である大蔵官僚について、大平さんは「大蔵省に入るほどの人ですから、危ない、危ない、バランス感覚の持主が多い」といい、「そんなに面白味のある人間集団ではないが、健全で安定感覚の持主の集まりだ。ただ、こういう雰囲気には飽き足りないで、三島由紀夫君みたいに飛び出していった人もある」と三島由紀夫の例を持ち出している。

政党の力が強くなるにつれ、大蔵官僚の立場は揺れ出したが、政党と大蔵官僚の間の微妙な関係にふれ、大平さんは「政党は大蔵省にとって痛しかゆしだ。この野郎と思うときが非常に多いが、この政党と組まなければ、どうにもならないジレンマがある。彼らの政党をみる目は非常に鋭い。鋭いがしかし、政党に対してはプロでもアン

子でもなく、そこは心得ているようだ」と指摘し、官僚の保身術にもふれる。しかし、そうかといって、大蔵官僚にも誇りが無いわけではないという。「政党は予算の手直しをするが、それは限られたもので、実体はやはり大蔵省が予算をつくっている。そこに誇りがあり、それだから、やっているんだ」と。予算に関しては政党が名を取り、大蔵官僚が実をとっているのが、実態であろう。